

座右の銘

「何が幸いするか...」

青山 裕彦

医歯薬保健学研究科 医歯薬学専攻 医学講座 解剖学及び発生生物学 教授



私が始めて「人間万事塞翁が馬」という言葉に出会ったのは小学生の時でした。良いことが悪いことの原因となり、また不幸が幸福につながるという考えは気に入りました。人生はどう転んでもなんとかなるもんなんや、なら好きなことをやれば良い、と勝手に解釈したのです。小学校4年生の時「試験の前には勉強せよ」と担任の先生から言われたのは衝撃でした。私は、試験というのは実力を問うもので、そのために勉強したって本当の力は測れないではないかと考え、試験を気にせず普段通り楽しく暮らしていたのです。「試験」のための「勉強」という「不幸」の始まりです。

大学に入ったら好きなことだけやれば良いのだ、と信じて入った京都大学理学部はまさにそういうところでした。必修の科目などほとんどなく、理学部のどの分野の科目でも受講できました。その代わりに将来にはなんの保証もありません。企業からの求人も全くありませんでした。だから、逆に、研究者への道をとることに余り悩むことはありませんでした。

大学院で岡田節人、江口吾朗、竹市雅俊、安田國雄の諸先生のもと、細胞接着の研究をした後、1981年福井医科大学の解剖学教室に採用してもらえました。これが人体解剖学実習と関わるはじめです。解剖学の教育にはかなりの時間が割かれます。同じ発生生物学分野の研究者でも理学部に就職したものと比べれば格段に研究時間が少なくなります。そのままでは勝負になりません。しかし、実際に人体の解剖をすることで得たものは、その後の私の研究の底を支えてくれることになりました。それは、体を構成する構造を、全て、一通り見たことにより、個体を構成する階層が理解でき、さらにそれがヒトの体であることから、ひとつひとつの構造を実感を伴って捉えられるようになったことによります。

1982年から2年間ポストドクとしてフランスに滞在しました（発生学研究所、Jean-Paul Thiéry主任研究員）。そこでは大学院時代の細胞接着研究の経験を求められたのですが、研究所としてはニワトリ-ウズラキメラ胚で細胞系譜を追跡する技術を基本に大々的に研究が進められていました（Nicole Le Douarin所長）。フランスでは見るだけでしたが、帰国後、キメラ胚を使って研究しようと思いたち、神経と筋とが特異的に結合するしくみについて計画しました。

研究を始めてすぐ、筋や骨の原基である体節を移植する際、うまく向きを揃えられない、という困難にぶつかりました。しかし「そもそも向きが変わってもちゃんと発生するのは？」とずぼらなことを考え、わざと向きを変えて移植してみますと、それからできてきた骨の向きも逆になっていたのです。「困ったな。いや、骨の形が変わるのは面白いぞ!？」となり、それ以来、「ホネの形作り」の研究をしてきました。こちらの方が当時は研究人口も少なく面白く研究を進められました。その後も鳥インフルエンザ流行のためウズラ胚が使えなくなったことがあり、仕方なくニワトリ胚同士での移植になりましたが、そのおかげで直接胚組織をGFP遺伝子で標識する技法を導入して今に至っています。本当に何が幸いするか解りません。

座右にはもう一つ「人間到る処に青山在り」があります。「青山」は「あおやま」でなく「せいざん」と読み、お墓のことだそうです。どこで死んでもかまわない、つまりどこでも生きていける。「人間万事塞翁が馬」を実践すると、こうなります。明日はどこにいるか分からない、というのも楽しいものです。